

# 森鷗外研究 アードルフ・フォン・クニツゲ

## —森鷗外の『智恵袋』との関連において—

### I

水内透

鷗外のドイツ三部作の一つ『うたかたの記』の中に、女主人公マリイが女家庭教師の蔵書を借りて、独学で教養を身につけたと語るくだりがあり、そこに『クニツゲが交際法』の名が出て来る。いきなり私事で恐縮だが、筆者がかつてドイツの学生寮で暮していた時、同室のドイツ人学生に、君は本をよく買うようだが、ドイツの家庭で聖書の次に最も多く置かれている本が何か知っているか、と聞かれたことがある。その時初めて上記の『人ととの交際について』(Über den Umgang mit Menschen 1788)の名を聞いた。その時彼が皮肉っぽくニヤニヤしながら、ただしまた最も読まない本だが、とつけ加えたのも記憶している。彼の説明が事実なのかどうかは判らない。というのが実はその後、数人のドイツ人に尋ねてみて、私は持つていないが、そう言われている、という答えしか得ていないからである。

この時は実物を見たわけではなかったし、何となく俗流警世家の書物だろうという印象で、そのまま打ち捨ててしまったのだが、その後『うたかたの記』を読んだ時にクニツゲの名を見出して、ハタ

とその時の記憶がよみがえった。そして何かの折に、或るドイツ人の口から出た冗談から、この名が今では普通名詞化して(Dat Knigge)、一般に礼儀作法の書を意味することを知ったのである。そして更に後に、鷗外の『智恵袋』の講談社学術文庫版に付せられた小堀桂一郎氏の解説で、同氏が筆者と同じような経験をしていること、またどういふわけか鷗外が同書を翻案であると断りながら、原典の作者名をどこにも挙げていないために、長い間、創作と同じような扱いを受けていたこと、だが実は原典がこのクニツゲであることと同氏が突き止めた経過などを読んだ。

鷗外はこの他に同じような書物として『心頭語』『慧語』も書いている。この後者の原典はスペインのイエズス会士バルタザール・グラシアンで、こちらについては鷗外は、日本でも厭世哲學家として有名なショーペンハウエルのドイツ語訳を利用したのだが、また最近、直接スペイン語原典から日本語に翻訳されてもいて、我が国でも知る人ぞ知るところであろう。それに対して、クニツゲの方は現在でも、小堀氏の指摘の如く、ドイツ文学史にその名を見

〔81〕

出すことも希だし、まして知る人はほとんどない。

そこでクニツゲについては、先に挙げた小堀氏の解説が今のところ唯一の、まとまった紹介ということになる。しかし啓蒙主義思潮を基軸に据え、その系譜に彼を位置づけた説明は明快なのだが、恐らく頁数の限界から、ささやかで、何よりクニツゲの生涯に大きく影響したフリーメーソンに全く触れていないのは、やはり片手落ちではないかと思われる。そこでこれに少々補足を加えてみたい、というのが本稿の意図である。

二百年以上に亘って人気を保っているとはいえず、唯一『交際法』によつてのみ知られ、しかも前記のように敬して遠去けられている作家だから、参考文献は少ない。その上、大部分は前世紀、あるいは今世紀の始めに発行されているから手に入れ難いのだが、ただ最近ペーター・ケーディングによる『アードルフ・フォン・クニツゲ―或る自由な紳士との出会い』(一九九一)<sup>3)</sup>が出版された。筆者が主として依拠するのはこの書で、その巻末の文献表に「クニツゲ男爵は本当に死んだのだろうか?アードルフ・クニツゲ男爵生誕百二十五年記念展覧会」の記載があるから、今でも関心を寄せている人が相当いるものと推測される。作品集の方は、全二十四巻の全集が一九七八年よりサウル社から出版されて、昨年完了したらしく、また十巻の選集が一九九一年にファッケルトレーガー社から刊行され始め、<sup>5)</sup>これまでに六巻が出ている。恐らく鷗外の利用した『交際法』のレクラム版も健在である。<sup>6)</sup>他に、筆者の知る限り、これまで日本ではほとんど書かれたことのないフリーメーソンに関する文献が、

余り詳細ではないが、最近数点出版されていて、これにより特にクニツゲが関係した啓明結社について、ある程度のまとまったイメージを得ることが出来る。つまり啓蒙の精神こそが人間を幸福にする<sup>7)</sup>と信じて疑わぬまま、四十三才の若さで世を去った宮廷人・作家の生涯を形成する太い軸がフリーメーソンとしての活躍であり、脱会後もその影がずっと尾を引いて、フランス革命後の上流階級に属する人々の不安と疑心暗鬼の中で、逮捕命令が出されたものの、実は死によつて危うくそれを免れたといういきさつがあり、彼の果たした役割の重要性を保証するであろう。

クニツゲ、正式にはAdolph Franz Ludwig Friedrich von Kniggeは、ハノーファーからほんの数キロのブレーデンベック(Bredenbeck)で一七五二年誕生、ゲータより五才年長で、兄弟は姉が一人だった。家系は代々高級官吏で、ハノーファー選帝公国で最も名門の一族であり、父親はOberhauptmann und Hofgerichtsratだったというから、現在の検事のような役職であろうか。だからその息子のアードルフは何不自由ない環境で育てられ、貴公子殿(Joh Herr Junker)と呼ばれていた。むろん家庭教師がつけられ、少年時代には虚弱な体質で、気紛れ、傷つきやすい性格だったという。将来は官吏に、と期待していた父親の目からすると、余り才気のある息子とは映らなかつたようで、可愛がつてはもらえなかつたらしい。しかし息子は父を尊敬し、父の寵愛を得たいと望んだ。特に父親がフリーメーソンのフリードリッヒ・ロッジの親方であったことに非常に関心を持っていたようである。彼の後年のフリーメーソンへ

の熱意は明らかにこれに起因するから、ここでそれについて少々触れておこう。

十八世紀は啓蒙思潮の色濃い時代として知られるが、「理性は神様とその聖者たち全てを嘲笑しながら表口から追い出したが、同時に悪魔とその一味をひそかに裏口から再び招き入れる」ことになって、靈魂の呼び出し術とか錬金術、神秘めかした秘密結社の活発な時代でもあった。フリーメーソンもその一つで、ゲーテ、レッシング、ヘルダー、あるいはモーツァルトらが会員だったことは有名で、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』に登場する「塔の結社」が、あるいはモーツァルトのオペラ『魔笛』の構成がフリーメーソンをモデルとすることもよく知られている。

とはいえ、フリーメーソンとは一体何か、という問いに一義的に答えるのは困難である。何故ならこの結社は元来、明確な思想体系を持っていたわけではなく、社交クラブ的要素を基調として、啓蒙主義、理神論・科学主義的で、同時に神秘主義的傾向をも帯びつつ、そこに集まる人物たちの顔ぶれによって、ロッジの思想と性格が決定されたといつてよいからである。いわゆる近代フリーメーソンが一七一七年六月二十四日にロンドンで創立を見たことは歴史的に著名な事実なのだが、それはそれまでに存在した四つのロッジ (Freimaurerloge) を統括する機関としてグランドロッジを発足させた日付なのであって、その各々のロッジには前史がある。つまりフリーメーソンの発生、起源に関しては様々な説があつて、中世の石工職人組合説 (中世における大聖堂、修道院等の建築は数十年、数百年に亘る年月を要する場合が多く、職人のギルドが構成され、

親方と呼ばれる指揮者のもとに作業を行つた。その集合所がロッジ (Loge) と呼ばれ、職業上の秘密伝達、あるいは相互扶助を行う場所でもあった)、あるいは聖堂騎士団説 (中世、十字軍の遠征に際して巡礼者の保護を目的として結成され、長年月活躍し続けて、巨大な組織にまで発達したが、一三一四年、最後の大総長ジャック・ド・モレーが処刑されて、崩壊した。その残党がスコットランドに逃れ、組織を再編したといわれているが、それがフリーメーソンの母体である)、あるいは薔薇十字団説 (ルネッサンス時代に存在したといわれる神秘主義的結社だが、実際には存在していなかったのだ、という説もある) 等々十数説あるが、いずれも決定的な根拠を欠いている。しかしその各説を信ずる会員がそれに合わせて、性格づけ、あるいは色づけを行う傾向があり、人集めの口実に使われもした。

彼らの組織は後には細かく夥しい段階に別れるが、基本的には徒弟 (Lehrling)、職人 (Geselle)、親方 (Meister) の三段階があり、それぞれの段階で高貴な知識を得て昇格してゆくものとされている。しかしこの知識の具体的内容については、どこにも記載されていない。それはロッジ内の技 (わざ) を通して、全人格的に悟られるものというようになっていて、この技は、会員以外には秘密とされているからである。この秘密性は思想的内容のみならず、組織その他にも見られるフリーメーソンの大きな特色だが、口の悪い研究家の言い方を借りれば、十八世紀の人間は「秘密をただ秘密そのものために求めたのだ。彼らは「無」の回りに無数のヴェールを幾重にも巻き付けた後、このヴェールを突き破ろうと、むきになって努めたのである。」<sup>(11)</sup> という面も否定し難いであろう。

イギリスに発生したフリーメーソンは、急速にヨーロッパの他の国々に入り込んで行く。ドイツに最初のロッジが創設されたのは一七三七年で、ハンブルク、マンハイム、ライプツヒヒ等の各都市に広がって行き、ほぼ啓蒙主義と同義の脈絡で理解されるようになっていた。だから啓蒙君主の代表であるプロイセンのフリードリッヒ大王は、はやくも一七三八年にブラウンシュヴァイクで加入して、一七四四年にはグランドロッジ「三つの地球」を創設している。その著作で有名なのはレッシングで、『エルンストとファルク』で、フリーメーソンを主題として取り上げ、寛容の精神を説いている。

ところでクニッゲに最も関係が深いのは啓明会 (Der Illuminatenorden) なのだが、これはもつと後のことなので、暫くその成人期を追って行こう。

父親のもとには様々な人が出入りしたが、特に幼いクニッゲにとっては、あらゆる国々でフリーメーソンが兄弟として結び合つて、人間性と人類の完成、そしてまたかつてのソロモンの寺院建築の時のように、永遠の調和に定められた世界の完成のために働くという思想が非常に魅力的だったらしい。彼もその一員となり、賢者の石とか、生命の靈液エリクツシールとか、または秘密の心理について知りたいと願ったのである。父親は折々、人と共に錬金術まがいのこともやっていたらしく、一層、彼の好奇心をそそったようである。

母親 (Frein Knigge) の早期の死 (一七三六年十一才) も、父と息子の関係に変化はもたらさなかった。しかし父の生活のおかげで、社交性は身につけていたようである。そしてこの頃の貴族の子弟に通常であったヨーロッパ旅行をするには若すぎるとして、父は息子

をコペンハーゲンへの旅行に連れて行き、そこで宮廷の華やかな生活をかいま見せたりした。七年戦争の影響をものともしない、全く優雅な生活だった。

だが母の死後三年、クニッゲ十四才の一七七六年に、この優雅な生活も突如として崩壊、以後の彼につきまとう苦勞が始まる。父親までもが死んだのである。死後判明したところでは、恐らく錬金術の失敗で多額の借金が残っていた。そこで莊園は差し押さえられ、未成年の息子には、年額五百ターラーが支給されるだけになった。以後、彼の生涯をつらぬく三つの願望の一つがこの時点に始まる。つまりこの莊園を取り返したいという願望である。結局、達成されないままに終るのだが。

一夜にして彼の環境は急変したわけだが、この時彼は父親が仕事熱心でも、誠実でも、家族思いでもないことを知った。そこで息子の生き方は恐らく意識的に対照的な性格を帯びることになる。

当座は内閣秘書官のもとに預けられた彼は、やがて一七六九年ゲッチンゲン大学の法学部に入學、後見人の要請で、債権者たちが百五十ターラー増加してくれた。ゲッチンゲン大学は英国王にしてブラウンシュヴァイク・リューネブルク選帝公であるジョージ二世の一七三七年創立による、当時は最も新しい大学で、寛容なイギリスの気風の支配する、つまり例えばプロイセンのハレ大学で哲学者のヴォルフが追放されたような、異端を中傷したりする空気がない大学だった。また同じ中部ドイツのイエーナ大学では、学生の放縱な気風甚だしく、市民との敵対関係が有名だったのに対して、非常に穏やかな雰囲気12の支配する大学でもあった。

クニツゲは講義にはきちんと出席したが、ただ熱心に法学を勉強したというわけでもなかったようである。むしろ自由を満喫し、貴族の子弟との交際を楽しみ、学生団体「協調と沈黙」の一員となっている。この大学は上記のように、当時としては寛大な気風の支配する所だったが、それでも実はその三年前に、すべての学生団体に禁止令が出て、解散させられていた。しかし逆にそれだけ秘密の結社の魅力を高めることになったらしく、後年の結社での活動の基礎をここで養ったことになる。むしろ彼にも当時の学生らしい、騒ぎ回る愚行の時代もあったが、ただこの頃ようやく時代の波に、即ち、啓蒙思潮、フマニスムス、寛容の精神等の洗礼を受けたことを特記しなくてはなるまい。ジャン・ジャック・ルソーの著作を宗教的啓示のように受け止め、教会で語られる声高な説教よりも、自然の素朴と清純を信じ始めたのである。この頃にゲッティンゲン森林同盟と文学史に記載されることになるヘルティヤーやミュラーが同大学で神学を学んでいたのだが、全く彼らには近づいていない。ひたすら勉強、結社と愚行に明け暮れたのであろう。彼には結社が最も居心地の好い場所であつたらしい。真剣に会員の行動を律し、人類への奉仕の理念を抱いて、組織の強化を説いたから、間もなく彼は人の尊敬を集め、会長となった。

しかしやがて学業を終わる日がやって来る。一七七一年の初め、ヘッセンの大臣アルトハウゼンと結婚している叔母をカッセルに訪問した折に気に入られた彼は、ヘッセン方伯に職を求めよう勧められる。初めは学生であるというだけで疑いの眼を以って迎えられるのだが、如何にも宮廷人に生まれついたような如才のなさが、こ

のいわば入社試験に合格させた。そこで一七七二年、カッセルの居城に<sup>レジデツツ</sup>試補として出入りする身となった。二十才であつた。以来、その宮廷人としての天性にもかかわらず、不思議なことに、彼は各地を転々とする運命を辿つた。だから生涯をつらぬく願望の二番目は、安定した宮廷人の勤め口を見出だすこととなるのだが、その第一歩をこのヘッセン・カッセルで踏み出したのである。

功名心に溢れた青年貴族にとつて、この町は合っているように思われた。この首都を小パリに変えようという考えにとりつかれていた領主の方伯フリードリッヒII世(1720-85)は、七年戦争の終結以来、町並みの整備に力を入れ、町に華やかさを生み出すために、市民の住宅建設に援助金を出した。ロココ様式の最盛期だつた。ルイ十五世を尊敬してやまない方伯は、フランス語、フランス的な華麗さとか、フランス文化を盲目的に偏愛して、当人の身は小国にあつても、精神的には大きな世界に生きている、と誇つた。そしてそのためカトリックに改宗したのである。(一七四九)そしてまたその派手好みから芸術や学問の支援者であつたばかりでなく、国の経済の向上にも並々ならぬ熱意を示した。この町は元来、羊毛産業が盛んだったが、それを更にピロードやサージ、フランネル等の織物、あるいは帽子、靴下等に製品化して輸出を促進した。その他手袋、革製品、銅、真鍮等の金属製品も世に知られるようになっていた。ただ最近再婚したばかりの、はるかに若い妻、フィリップーネはすでに結婚前から、行状に不身持ちの噂があつた。とはいへ、この世界に入ったばかりの若者にとつては、このような話しに巻き込ま

れるのは危険だから、身を乗り出さない方がよいと思つたのは当然である。後に「気軽に人の噂を、特に誰かにマイナスのイメージを負わせるような話を、単なる人聞きに基づいてするな。そういう話はしばしば全く根拠のないものか、多くの手を経て、少なくとも誇張され、こま切れにされているものだ。」(交際法十八)と記すように。

宮廷のわざとらしい雰囲気、気取つた振る舞いや言葉使いなどには、慣れるより仕方がなく、クニツゲはその中で異質なものを感ぜつつも、努めて気にしないよう心掛けた。その上、宮廷では実際に有能である必要はなく、高位者の寵愛を得ればよいのだということが飲み込めて来た。そして孤独を感じながらも、功名心に溢れたこの若者は、次第に目立ち始め、精神の敏活さで周囲に一目置かれるようになった。

例えばカッセルの町をフランス風に整備するには無論金が必要だったから、先に述べたように、様々な新しい産業が開拓され、輸出もされて一定の成果を挙げていたが、当時流行し始めていたコーヒーは事情が逆で、輸入がどこでも増大し、諸侯はこれを抑制するのに躍起になっていた。カッセルでは遂には健康によくないとこの口実で一七七三年に禁止令が出されたが、余り効果はなかった。これをクニツゲは、その頃プロイセンとブラウンシュヴァイクで発見されたチコリ (Zichorien) に代えることを提案し、その栽培を力説した。更にまた気泡パイプをトルコやウィーンから輸入せず、当地で製造せよ、とも説いた。こういう積極性が領主の目に留まり始めたのである。

時とともにクニツゲはこの世界に適合し始めた。罪のない冗談で貴婦人を笑わせ、気に入られるようになった。伯爵のみならず、伯爵夫人の受けもよかったという事実は、彼の外交的性格の天性を証明するものであろう。何故なら、すでにその頃領主夫妻の仲は冷えて始めていて、宮廷内の人間は厭厭なく、この両派のどちらかに属するという状況だったからである。そして夫人はクニツゲを夫の側の情報の探り役として利用した。彼はこれを巧みにやってのけたが、むしろ面白いものではなかった。しかし彼は女官たちの一座では常にふざけ、からかいの種を見出して楽しむことが出来た。その中でヘンリエッテ・フォン・バウムバッハ (Henriette von Baumbach) は特別に美しくはなかったが、少々素朴なところがあって、からかい易かった。宮廷の人間に特徴的な、生半可な教養と自惚れ、虚栄心が読み取れたからである。

今や彼は宮廷生活を享受し、義務をも果していた。それなりの自由もあり、物質的生活にも不自由はなく、君主の覚えも目出度かった。それにもかかわらず、いつしかそうした生活の中で、いつもある種の不満足感が残るようになった。それはいつも「人間にはより高次の使命がある筈だ」という大学時代の教えを思い出させたのだが、それがどういふものなのか、彼には漠然とした予感で掴むしかなかった。実行に踏み出すには余りにも茫然としていた。そうなるに浮かび上がってくるのは、父親の姿から知らされた、あの結社、つまりフリーメーソンの存在だった。その一員となれば、自分の求める意味深い活動のイメージが明瞭な輪郭を帯びるはずだった。そこでそれに加加入出来る年齢になることを、彼はひたすら待つように

なつたのである。

そうして一七七三年、遂に彼はフェルディナント・フォン・ブラウンシュヴァイク公のもとに赴き、受け入れてくれるよう頼み込んだ。フェルディナント公はその前年に「厳しい戒律の儀礼」(Strikte Observanz)のグランドマスター(Großmeister)に選ばれて、会そのものに栄光を与えたばかりであつた。

「厳しい戒律の儀礼」とは、先にも述べた聖堂騎士団後裔説を強く主張する派の一つで、ヨーロッパのほぼ全体にフリーメイソンが普及し始めた頃、ラウジッツ出身のフント男爵(Karl Gotthelf von Hund)がパリで聖堂騎士団が密かに存続している事実を知つた、と主張したことに始まる。ドイツへ帰国すると、未知のスプリング・イン・コンニグ上位者から秘儀への手ほどきを受け、かつ、その組織をドイツで広めるよう義務を負つた、と強調した。帝国直属貴族で、豊かでもあつた彼は、エルベ河とオーデル河間のドイツの第七地区の親方として一七五四年、数人の貴族および高級官吏を周辺に集め、自分への絶対服従と「尊い騎士団」の密かな存続と再建に従うことを義務づけた。ロジツでは名誉を重んじ、秩序を尊重し、時間厳守とともに、寛大に慈善事業を行う氣風が支配的だつた。使われる言葉もフランス語でなく、ラテン語である。そして会員たちは、高い秘密の知識へ達し得る道を辿りたがつた。つまり生命の靈液とか賢者の石、鍊金の術の発見などが抵抗し難い魅力を發揮したのである。これは今から見れば、逆に教義そのものの浅薄さを裏書きしているともいえる。しかし詰まるころ、彼らはロジツや魔術、ミステイクに、当時の硬化した政治的狀況が彼らに拒絶したものを求めた、というのが

真相かも知れない。そして先に述べたように、ブラウンシュヴァイクのフェルディナント侯がグランドマスターに選ばれた時、この派のロジツは、多くの著名人をも、ましてやクニツゲをも惹きつける新しい輝きを放つことになつたのである。

ただクニツゲがここへ赴いた時、彼にとつてはこの結社は、大勢の人間が高貴な目的のために集まる所であり、人類愛、人間性、美德、宗教的寛容へと努める所を意味していたにすぎなかつた。だから今やそういう集まりに出席出来る身分となつた彼は、宮廷でも従来のような生活態度を変えなくてはならないと思うようになつたのである。敏感な伯爵夫人はこの変化に氣づかないではいなかつた。そうしてそのまま放つてはおけないと思つたのであろう。自分たちの秘密にも或る程度通じているクニツゲが、伯爵にそれを漏らすような事態が生じてはならなかつた。そこで一計を案じて、うかつにもクニツゲはそれにはまつてしまつたのである。或る朝いつものように彼は同席している宮廷の男たちやら、女官たちに愛嬌を振りまき、笑わせていたが、やがてもつぱらヘンリエツテに向かうと、様々な話で楽しませたり、不安にしたり、得意の境地へ引つ張り込む。そして氣がつくと、大勢に取り囲まれて、傍らで伯爵夫人がこう言つていた。「ムッシュ・クニツゲ、あなたは私の人の好い女官のバウムバッハがこんなにもお氣にめしたようですから、もうこの人と結ばれるお積もりだと見てもよいのでしょね。」いつもなら當意即妙な返答で応ずる不遜なクニツゲが、この時ばかりは不意を打たれて、困惑しきつたままだつたという。そして結局、何度も身を屈めて切り抜ける他はなかつた。それへ伯爵夫人は「皆さんへ新しい幸福な

ペアーを御紹介出来て嬉しく思います。」とおつかぶせて、ことは決まってしまったのである。夫人の苦肉の策が成功した。クニッゲが、これまで寵愛を受けたのと同様にまた犠牲にされたのだと気がついた時は遅かった。一週間後には伯爵夫人の費用で結婚式が行われたのである。裕福な男との結婚を夢見たばかりに、元をかけて宮廷に娘を出したヘンリエッテの母親は不満だったが、ヘンリエッテ自身は、宮廷で人気のある男との結婚に満更でもなかったらしい。

しかしクニッゲにとつては、この出来事に象徴されるような宮廷の空気が耐え難くなりかけていた。なるほど煙草工場の長にされるなど、君主の彼への評価は高くなり、人々はもはや彼を新参者とは見なさなくなつたどころか、へつらいすら浮かべ始めていたのだが、至る所で彼は王権神授の仮面の下に専制の匂いを嗅がずにはいられなかつたのである。この領主も自己の主権が神からでなく、ジャン・ジャック・ルソーのいうところの人民との契約に由来することを忘れていた。彼はプロイセンの啓蒙君主を模範とする気はなく、街の風景に身分の差が反映されることを好み、衣服にすら秩序をもうけた。毛皮、絹、銀等を禁じたのである。

しかもフリーメーソンのロッジでは、クニッゲの宮廷での位置を全く顧慮する様子はなかつた。彼と同時に入会した連中はとつくに昇格しているのに、彼は依然として見習いだった。そこで尋ね回つたあげく、彼の現在の収入では、昇格に必要な五百ターラーは払えないからだ、という理由が判明したのである。高貴な秘密に近づく道は閉ざされていた。これではフマニスムスと寛容への彼の努力は途中で挫折する。深く傷ついた彼は苦悩した。そして出てきた結論

がカッセルを去ることであつた。無論驚いた方伯は将来を約束して引留めたが、ハノーファーの親戚のもとへ向かうとの口実で、密かにプロイセンの啓蒙君主を頼りとしながら、カッセルを去つた。一七七五年三月、娘のフリーツピーネの誕生一箇月後である。二十三才であつた。

その後、彼と家族はバウムバッツハ夫人の住むヘッセンの小村、ネンタースハウゼンに二年近く住み、次の就職先を探しながら、フリーメーソンの会に出席したり、ドラマとか詩、時には小説を執筆して暮した。その頃彼は宗教問題で悩んでいる。正確には信仰と不信仰の間で揺れていた。一方で啓示された真理を疑いつつ、他方で理神論は彼を不安にさせた。彼はより高次の超自然的な啓示に憧れていたのである。フリーメーソンの秘密は、それを満たしてくれるかも知れなかつた。しかし就職ははかばかしく進行せず、最も期待をかけたプロイセンからは受け入れてもらえなかつた。妻に促されて、就職口を求める旅に出る。ワイマールでゲーテと知り合いになつたのもその頃である。しかしカール・アウグスト公は彼に侍従章を送つて来ただけであつた。もつともワイマールも多くの教養人が夢見るような国とは言えなかつたが。

そこへ思いがけなく一度に二箇所から就職の誘いが来る。カルルスルーエとダルムシュタットである。この両者の間で迷つた彼は結局ヘッセン・ダルムシュタットに決める。その直前に訪れたハーナウが気に入っていたためであつた。こうして一七七七年夏から、後にグリム兄弟で有名になるハーナウに住むことになつた。その頃に



は先の宗教問題に「宗教とは心の高まりであり、全感情だ」<sup>(14)</sup>と一つの結論を出している。悟性にのみ由来する宗教は、完全な、真の宗教では有り得ない、と。

ハーナウの皇太子ヴィルヘルムは歓迎の表情で彼を出迎えてくれた。クニツゲは今や「理性が支配し、カッセルと異なつて、陰謀の支配しない宮廷で生活してよい」<sup>(15)</sup>幸福を味わう。そして間もなくこの生活に溶け込み、最も楽しい社交家で、繊細な神経の宮廷人であり、貴婦人たちの感じのよい、謙虚な、礼儀正しい友となる。すでに宮廷での談話にはなくてはならぬ人物の一人であつた。この頃彼は演劇に力を入れている。一座を作り、これはカルル王子が熱心に援助してくれたこともあつて、一応成功の部類であつた。

しかし宮廷では、逆に段々と娯楽や催物に対して憤む気分が充ち始めていた。プロイセンとオーストリーの間の戦争が目前に迫つている状況が人々の気持ちを重くしていたのである。その上、クニツゲにとつて宮廷の生活スタイルは出費が大で、経済的には苦しかった。こういう雰囲気の中で仕事を越えて世界へ働きかけたいという彼の願望は、次第に意義を失つていった。誰も彼の能力に期待をかけてはいなかつたのだから。この頃、金のないフリーメイソン会員の上昇格は問題にならないとの噂が伝わつて来て失望を大きくした。しかし逆にそれだけ彼の心には、フリーメイソンの存在が重要性を増して来ることになつて、より高い叡智への抑え難い渴望を静めたいと願つた。彼はフリーメイソンの思想が思慮に富んだ人たちによつて生み出されたと信じていたのだ。神と自然との一致の中で暮らしていた人たちが直接に、このフリーメイソンの源泉から聖なる

英知を汲んだのだと。だからこの源泉を再び人の目に明らかにすることほど大切なことはないと思われた。それによつてフリーメイソンの本来の使命を認識し、人類をこの政治的、倫理的、経済的な貧窮から導き出すのだ。

そういう探求の中で彼は偶然に、もう一つのフリーメイソンの支流に突き当たつた。黄金・薔薇十字団 (Gold- und Rosenkreuzer) である。この会の組織は聖堂騎士団のそれに酷似していたから、彼は表面的には種々の異なつた形態の背後に、あらゆる体系に共通の真理が潜んでいると確信することが出来た。クニツゲは、この会のメンバーの一人であるマールブルク大学の教授 F・J・シュレーダーと知り合う。シュレーダーによると「厳しい戒律の儀礼」は、「聖堂騎士団を再建する使命を与えられていたのだが、現在は墮落して、その神秘性を失つてしまつた。薔薇十字団はその過誤を除去するために作られたものである」<sup>(16)</sup>しかし彼は、それにもかかわらず、クニツゲには「厳しい戒律の儀礼」を去るべきではなく、むしろそれを改革せよ、と説得した。

この頃、クニツゲはまたヴォルフエンビュッテルのフリーメイソンの大会に出かけて、レッシングに会つてゐる。レッシングは机の上に『エルンストとファルクの間のフリーメイソンのための対話』を置き、フリーメイソンの起源を探る試みを子供っぽいと評した。その起源が人の心、市民社会にある、というだけで充分ではないかというのである。その活動は国のためではなく、個人の幸福のためにあるのだからだと。しかし位階が上昇するにつれて次第に聖なる真理に近づいて行くのだと信ずるクニツゲにとっては、源泉を知ら

ずに、その知識なしに目標に到達出来るとは思えなかった。彼には  
 レッティングより、むしろシュレーダーの方に共感出来るものを多く  
 見出していた。

それから余り経っていなかった頃、思いがけなく彼を昇格させよ  
 うとの話が上位者から届いた。しかし、あの上位への燃えるよう  
 な期待は、彼にはもうとつくに消えてしまっていた。結社の上位者  
 たちが身分の差に異常なほどの価値を与えていることを知ってし  
 まった彼には、今や結社の改革にしか関心がなくなつたのである。

新しい祭式を提唱したいという希望が湧いて来た彼は、この頃こう  
 言い切っている。「信仰とは、我々の知性の思わず知らずの行爲だ。」<sup>(17)</sup>  
 だからクニツゲの構想は、「民衆のための、あらゆる認識の基礎づけ  
 となり、あらゆる国家、身分と宗教の人のための普遍的な組織の建  
 設」<sup>(18)</sup>だった。キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒など、あら  
 ゆる宗教を統合し、宗教をめぐる戦いは終了させる。宗教はただ一  
 つしか存在しない。その掟は健全な理性と人間愛を切り離さないこ  
 と。そして創造主が設定したあらゆる関連に従って、人間に課され  
 た聖なる義務の総括を行う。人間は原初において純粹であつたから、  
 創造主の存在を感じ取ることが出来たが、文化の発達とともに、次  
 第に高次の世界を瞑想する時が奪われてしまった。これへ再び導き  
 帰すのがフリーメーソンのつとめである。<sup>(19)</sup> こういう論旨の著作をク  
 ニツゲはこの頃出している。ただし、その内容は薔薇十字団の色彩  
 が濃すぎるとの批判を浴びた。

一七七九年、プロイセンとオーストリーの争いは休戦となつた。  
 当然、それに従軍していた皇太子が帰還して来たのだが、その際あ

る薬劑師の娘を伴つて帰つて来たのが騒ぎを惹き起こすこととなつ  
 た。というのが、こういう問題から極力、身を遠ざけていたのにも  
 かかわらず、女官たちに人気があつたばかりに、クニツゲはこのス  
 キャンダルの憤激の渦に巻き込まれ、不愉快な交渉をさせられるは  
 めになつたのである。そして複雑な力関係の中で、彼は結局、伯夫  
 人と女官たちの嘲笑を受け、更には皇太子自身の不興を買つて、暫  
 時、宮廷への出入りを禁じられることとなつた。そして孤独な生活  
 を余儀なくされる。

ところが、こういう状況の中で彼の生涯を決定する転機が訪れた。  
 七月に「協調」ロツジヘバイエルンから一人の会士が現れ、これと  
 知り合つたクニツゲが改革について尋ねられて、自分の意図を述べ  
 たところ、それをすでにほとんど実現している結社があるとして、  
 「啓明会」の存在が伝えられたのである。ドイツにまだ自分に未知  
 の結社が存在することにひどく驚いたクニツゲは、ただちに入会の  
 手続きを取つた。それぐらい秘密が保たれていたからには、完璧に  
 組織されているのだろうと考えたのである。そうして或る人気のな  
 い場所で、この会士コンスタンツォ伯爵によつて入会の儀式が行わ  
 れた。そこで伯爵はクニツゲにピロ (Philo) という名前を与え、結  
 社の「植物学校」(Pflanzschule) の「ミネルヴァ・クラス」の書類  
 を手渡した。会員の秘密を守るための暗号が古代趣味に基づいてい  
 て、後に判明したところでは、会の創始者ヴァイスハウプトはスパ  
 ルタクスと称して、その所在するインゴールシュタットはエレウシ  
 スと呼ばれていた。<sup>(20)</sup> オーストリアはエジプト、ウイーンはローマで  
 ある。「植物学校」とは会の見習いを養成する生徒結社で、カルルス

ルーエのカルル・オイゲン公も作らせたことが知られている。シラーが後にニーチェに「自由のラッパ卒」と渾名されるほど懂れた自由の概念は、ここでその萌芽が養われたという。<sup>(21)</sup>そして今後クニツゲは当会においてアテネと称するバーダー教授の指示を受けることになる。ピロのいる場所はエデッサである。そしてこの時以来、クニツゲは全力をこの会の形成に捧げるのである。

啓明 (Illuminat) という名称の団体は本来一つだけではない。神や人間について内的な啓示を得たいという神秘家とか形而上学者たちもしばしばそう名乗っている。しかし現在では、上記のヴァイスハウプトの創設した結社を指すのが普通である。アードム・ヴァイスハウプト (Adam Weishaupt) は、一七四八年二月、インゴールシュタット生れだから、クニツゲより四才年長、一八三〇年にゴータで亡くなっている。七才で父親を失ったので、その名付け親であるイックシュタット男爵は、甥の息子に当たるこの少年をイエズス会経営の学校で教育させた。そういう宗教的環境にもかかわらず、一つには時代の影響を受けたのであろうが、彼はイエズス会の教義に対して次第に疑念を抱くようになり、それに対する解答を皮肉にも、男爵の所有していた理性派に属するフランスの哲学者たちの著作の中に見出したといわれる。

インゴールシュタット大学で家庭教師や伝導師として働きながら法学を学んで、一七六八年に卒業すると、この大学の学長であったイックシュタット男爵のひきで、ただちに助講師に採用された。一四七二年に創立という歴史を持ち、一八〇二年にはランツフートへ移され、更にはミュンヘンへ移されることになるこの大学は、ル

ネッサンス期にはロイヒリオン等の人文主義者たちによる輝かしい経歴を持つているのだが、一五八〇年代からは神学部と哲学部はイエズス会士に占められてきて、当時バイエルンにおける反宗教改革の牙城となっていた。しかしその中でクリスチャン・ヴォルフの弟子で、啓蒙主義者であった男爵の庇護のもとに、ヴァイスハウプトは順調に経過して、一七七二年には教会法講座の教授の席をイエズス会士の手から奪いかえすことに成功、更に二年後には二十七才で法学部長となった。一七七三年に結婚したが、男爵の反対を無視したことから、その後両者の仲は割れたままだったという。

しかし彼らはイエズス会士らによって手厳しく白眼視され続けた。イエズス会そのものは、度々、俗界と衝突事件を起こすことから、一七七三年に法王クレメンス十四世によって解散命令を受けるのだが、事実上は陰に陽に権勢を振り、ヴァイスハウプトはその陰謀に悩まされ続けた。そこで先に述べた当時流行の秘密結社の結成による対抗措置に至ったのである。まず「完全者同盟」<sup>(22)</sup>を結び、次に一七七六年五月に「啓明会」の創設となっている。当初は四人の学生会員と彼自身とで出発したが、その目的のみが明確で、方法についてはまだ曖昧であった。そこで翌年ヴァイスハウプトはフリーメイソンに加入、「思慮深いテオドル・ロツジ」に入会した。このロツジは間もなく、事実上「啓明会」に吸収された形になったという。このミュンヘンの会員たちをアレオパギテンと呼び、それを中心に一七七九年には会の教則を作った。位階はイエズス会の模倣で、<sup>ノイニツェ</sup>修練士、ミネルヴァ、悟ったミネルヴァという三段階となる。先のクニツゲに手渡された書類上の名は、これに基づいていたわけであ

る。そして秘密性を高めるために、下位者は上位者から常に監督を受け、誰であるか明瞭でない上位者に服従するという規律を設定した。

クニツゲが入会したのは、丁度この頃であった。彼は会の義務を熱心に果した。規定にある啓蒙的な文書を研究し、知人、友人が会に対して好意を持ち得るか、あるいは敵意を持つかを観察して、特別の日記に記入し、毎月ミュンヘンへ送って監査を受けた。彼と同時にコンスタンツォによって勧誘された三人の商人たちと協力し、喜んで匿名の監督に従ったのである。

しかし最初の感激は急速に冷却することになった。というのが指導される教育内容が余りにも、年端もゆかぬ生徒のための学校の教材じみていたからである。更にミュンヘンから送られてくる書簡の文体が粗雑で、命令口調であるのが彼らの神経を逆撫でした。クニツゲもヴィーラントやポウプ、ヘルヴェティウスらの、新教国なら誰にでも手に入る啓蒙的な書物を読むことにどんな意味があるのか、自問することになった。詐欺にあっているのではないか、との不安も湧いて来た。そして脱会を考え始めていたのである。

するとそこヘインゴールシュタットの会士スパルタクスから<sup>オパレン</sup>上位者より指示を受けた、との前置きとともに、今後は自分がピロと文通する、との連絡があつた。この書簡に漂う雰囲気、そこから読み取れる精神はこれまでと全く異なっていて、クニツゲの気に入つた。そこで危うく彼は踏み留まつたのである。それどころか、スパルタクスはこの会が、「極めて精緻で、確実な手段によって、無知蒙昧と悪意に対する勝利を世界の美德と叡智にもたらし、学問の

あらゆる分野で最も重要な発見をするという目的に到達しようとする結社<sup>23</sup>」として描いて見せたのである。クニツゲにはこの会の目的が、彼の考える組織と一致するように思われた。「敵しい戒律の儀礼に失望し、黄金・薔薇十字団には詐欺の匂いを嗅ぎとつた彼だったが、ようやく理想の結社を見出したことになる。しかしそれにもかかわらず、まだ彼には一抹の疑念が拭い切れなかつた。まだ最終的な確信が持てなかつた彼は、それをスパルタクスに率直に告白したのである。そこですでにクニツゲの熱心さと有能を認めていたスパルタクスは、自分のもことから彼が離れて行くのを恐れて、秘密を打ち明けた。実はこの会は、「まだ存在してはいないのだ。」と。自分の頭の中にあるだけに過ぎない。幾つかのカトリックの地方に下級の「植物学校」が設置されているだけなのだ。しかし上位については、もう素晴らしい考えが幾つかある。どうか私心のない詐欺を許して欲しい。組織の心臓にまで入り込んで来た彼のような素晴らしい協力者とは初めて知り合つたので、どうか会のために尽くして欲しい、とスパルタクスはクニツゲを古参会員、つまりアレオパギテンの一員として扱い、頼んで来た。

クニツゲが色々と想い描いていた、この会の美しいイメージは幻像だったのだ。この時彼は心底から怒りを覚えたらしい。当然であろう。脱会も無論考えたようである。しかしそこでまたもや彼は踏み留まるのである。脱会をしなければ、今や会の運命は彼の手中にあつた。こうなると、どこかに自分の理想を実現している既成の結社の存在を期待するよりも、むしろそのような会を設立する方がよいのではないか。かなり早く冷静になつた彼は、スパルタクスの招

請に依じて、ミュンヘンに赴く。上級位の位階体系を作るためである。そうして一七八一年、アーダム・ヴァイスハウプトと直接に知り合う。これが初めての出会いであった。

ここで規約に詳細に目を通すことの出来た彼は、自分の期待が満たされそうな予感を持った。啓明会員は人類愛と公共の福利への敬意の思想を広め、世界の様々な邪悪な意図を抑制し、不正に対抗して、困窮する美德に助力を惜しまない。そして重要な人物の援助に配慮する。公益に資することを歓迎する。学問、芸術と産業を育成する。会員相互間の身分の差は除く。<sup>(24)</sup>更に「黄金の中庸」を守ること、飲食や衣装の贅沢を避け、市民としての仕事への忠実、かつ熱心な従事も更なる義務である。

イエズス会がその邪悪な目的遂行のために用いるのと同じ手段を以て世界に善をもたらす、という理念にヴァイスハウプトは自信を持っていったが、クニツゲはこれを危ぶんだ。青年たちが今後も永続的にヴァイスハウプトの要求に従うとは考えられなかったのである。そして実際に、クニツゲが会った限りでは、彼らはヴァイスハウプトの専制的な態度に大きな不満を抱いていた。この会長は彼に、見知らぬ上位者に委託されて派遣されたような態度を取るように、と指示したのだが、彼はこの両者の和介の労を取る役割を引き受けたつもりだった。

ミュンヘンに帰ると彼は会長に、フリーメイソンの中に入り込んで、ロツジの色々な指導的職務を啓明会員で占めるよう提案した。そうやって会員をこちらの組織に移してしまうのである。そして実際、この方法で約五百名もの会員の加入に成功した。更に結社を三

段階に分類することにヴァイスハウプトと意見の一致を見た。つまり基礎位階はミネルヴァ連士たちのクラスで作られる養成級 (Pflanzschule) で、修練士 (Novize) からミネルヴァ練士 (Minervalis) へ、更に小啓明士 (Kleiner Illuminat) へと昇進して行く。第二位階はフリーメイソン級、つまり従来組織で、二つの部門に別れる。まず徒弟 (Lehrling)、職人 (Geelle)、親方 (Meister) の三段階より成る象徴的フリーメイソン (Symbolische Freimaurerei) へ、その上にスコットランド修練士 (Schottischer Novize) と騎士 (Schottischer Ritter) より成るスコットランド・フリーメイソン (Schottische Freimaurerei) が置かれる。そして第三位階として小密儀 (Kleine Mysterien) と大密儀 (Große Mysterien) があり、前者は啓明祭司位 (Illuminatischer Priester) と啓明統轄位 (Regentengrad) から成り、後者はマジ (Magier) と王 (König) で、これが締め括る。

クニツゲは遂に一つの結社の中に安定した位置を見出だして、幸福を感じていた。この結社は諸民族を成熟へと導き、自由と専制との永遠の循環を打破するであろう。人間には啓蒙精神と自由があれば、国家と君主は不要である。君主と国家は暴力を用いなくても、地上から消滅すると思われる。人類は将来一つの家族となり、この世界は理性的人間の住むところとなる。そうして啓明会は、人類の普遍的な秘密の英知の学校となろう。当時このような思想や発言が容易に危険視されたであろうことは、いうまでもない。しかし差し当たりはまだ会は拡大し続けた。特に一七八二年七月十六日から九月一日までの五〇日間、ヴィルヘルムスバートで世界フリーメイソン

ン大会が開催され、その際、この会は一見、「嚴格派」の会に見える様相を呈していたのにもかかわらず、そのうちの多数が啓明会に移つて来たのである。しかも高潔な人格と教養の深い精神の持主で、クロップシュトックらの文人と結びつきがあり、高い社会的名声を得ている作家のJ・J・クリストフ・ボーデ（一七三〇―一七九三）の勧誘に成功した。以後啓明会はヴァイスハウプト、クニッゲ、ボーデの三人によつて基礎が固められ、数多くの著名人を入会させた。ただ一説によると二千人を越えたことはなかったという。

しかし同時にこの頃からクニッゲは、小説の売れ行きも好調で、その執筆に忙しくなつて来たことを理由として、各地区の長に仕事を任せる案を提出している。このこと自体は問題にならなかつたが、しかしそういう考えが出て来る原因、つまり会員数の増大は、実は必ずしもヴァイスハウプトの喜ぶところではなかつた。それによつて本来の会のイメージが損われる懸念を持つたのである。他方でクニッゲの方は、会長がこのような成果の絶対的条件と見なしているイエズス派の方法の模倣を、心から納得して肯定していたわけではなかつた。このような亀裂がこの頃から少しづつ大きくなり始めていた。クニッゲは会の拡大に主眼を置き、ヴァイスハウプトは、下からの会の強化をまず第一に設定した。

余談だが、『うたかたの記』にマリーの教養書としてクニッゲの著書と並んで、フーフランドの名が出て来る。この名は鷗外の他の作品にも出現するし、幕末の日本では医学書の翻訳を通じて有名だったが、その彼もこの頃入会している。彼と親交のあつたゲーテの入会もほぼ同時である。

一七八三年三月、物価高を理由にクニッゲ一家は、フランクフルトからハイデルベルクに引越をしている。それから間もなくクニッゲを驚愕させる文書が届く。ミュンヘンのシュレツケン・シュタイン侯爵が、ヴァイスハウプトの意向を受けたとして、規約と位階体系の変更を通知して来たのである。規約の啓蒙の精神、自由と人間の成熟を説いた箇所が全て、煽動的な響きが強すぎるという指摘であつた。そしてまた各人に授けた位階を取り消せ、との指示もあり、それはクニッゲが余りにもフリーメーソン風な色彩を濃く出し過ぎているから、というものであつた。ヴァイスハウプトには自分の造り上げた世界をクニッゲが壊そうとしているように見えて来る一方、クニッゲにはヴァイスハウプトに潜む、他人の無条件の服従を望む専横な性格が強くなつて来たことと映るようになっていたのである。傷つき、失望して、彼は実務から手を引き始める。そうでなくても著作や批評に忙しかつた。小説を書き、オペラ『フィガロの結婚』について書く。そうして遂に一七八四年、あれほど心身ともに打ち込んだ会を正式に退団する。三十三才になっていた。当時の彼の家計は出版と年金だけで、充分とはいえなかつた。その上に結石症を病んでいた。以後この病気で苦しむことになる。

他方でこの間、啓明会を取り囲む社会的状況も厳しくなつて来た。一つにはフリーメーソンに似て非なる黄金・薔薇十字団が反啓明会運動を強めて来たことであつたが、それよりもカトリック教会、特にイエズス会が、この結社の社会的平等主義と会員の徳性の高揚による社会改革の方向を急進主義と見て不安を抱いた方がはるかに大きかつた。彼らは様々な画策の後、ついにはバイエルン選帝公を動

かす材料として、カール・テオドール公の妹であるマリア・アンナ公女を通して、啓明会士のリストを提出したのだが、その際添付してあった文書が会の運命を決定してしまった。つまりオーストリア皇帝ヨーゼフ二世によるバイエルンの一部とオーストリア領オランダとの交換計画に、啓明会士が参画しているという「反バイエルン国際主義的陰謀」がでっちあげられていたのである。そこで一七八四年六月、一七八五年三月および八月の三回に亘る勅令により、啓明会は禁止されるに至った。

これで多くの啓明会士は公職から追放され、あるいは投獄され、ヴァイスハウプトも大学から解職されて、当時バイエルンのただ中に位置しながらプロテスタントで自由帝国都市であったレーゲンスブルクに逃亡する身となった。この大打撃にもかかわらず、会の活動は以後も暫くバイエルンの外で続けられるが、その上に次々と打撃が加えられる。その一つが、啓明会がフランス革命に点火剤の役割を果たしたという説で、このため脱会していたクニツゲにまでも嫌疑がかかり、以後生涯圧迫され続けられることになるのである。

注

- (1) 小堀桂一郎訳・解説「森鷗外の『知恵袋』」 講談社学術文庫 昭和五十五年
- (2) バルタザール・グラシアン著 「賢者の教え」 J・レナー ド・ケイ編 加藤諦三訳 経済界 一九九三年
- (3) Peter Kaeding: Adolph Freiherr von Knigge, Begegnungen mit einem freien Herrn Verlags-Anstalt Union 1991
- (4) Adolph von Knigge: Sämtliche Werke 24Bde. Hrsg. von

Paul Raabe. Saur, KG. 1978

- (5) Adolph von Knigge: Ausgewählte Werke in 10 Bänden. Fackelträger Verlag, Hannover 1991
- (6) Adolph von Knigge: Über den Umgang mit Menschen. Hrsg. von Karl-Heinz Göttert Reclam jun. Stuttgart 1991
- (7) 赤間 剛「フリーメイソンの秘密」 三一書房 一九八三年  
マンリー・P・ホール、吉村正和訳「フリーメイソンの失われた鍵」 人文書院 一九九二年第五版
- 吉村正和「フリーメイソン、西洋神秘主義の変容」 講談社現代新書 一九八九年
- 湯浅慎一「フリーメイソンリー その思想、人物、歴史」 中公新書 一九九〇年
- セルジュ・ユタン、小関藤一郎訳「秘密結社」 文庫クセジュ 一九九一年
- (8) マックス・フォン・ベーン「ドイツ十八世紀の文化と社会」 三修社 一九八四年 一二四頁
- (9) Allain Demurger: Die Templar. Aufstieg und Untergang 1118-1314 Verlag C.H. Beck München 1991 S.223  
筱田雄次郎「聖堂騎士団」 中公新書 昭和五十一年 一七二頁
- (10) ロラン・エディゴフェル、田中義廣訳「薔薇十字団」 文庫クセジュ 一九九一年 一〇六頁  
種村季弘「薔薇十字の魔法」 河出文庫 一九九三年 七二頁

- (11) M.v.・ヘーン 一二四頁
- (12) 潮木守一『ドイツ大学への旅』 リクルート 昭和六十一年  
一七頁
- (13) マンリー・ホール 二二〇頁
- (14) P. Kaeding 一〇〇頁
- (15) P. Kaeding 一〇四頁
- (16) P. Kaeding 一一六頁
- (17) P. Kaeding 一二四頁
- (18) P. Kaeding 一二四頁
- (19) P. Kaeding 一三〇頁
- (20) 吉村 四九頁
- (21) 湯浅 六六頁
- (22) 湯浅 七八頁
- (23) P. Kaeding 一五一頁
- (24) P. Kaeding 一六四頁